

小説 俺を見てくれ

「二年生になったが、面白くない。俺は完全に進路を間違えた。そもそも、この学校に来たのが間違いだった。高校生になったら、もっと自由にクリエイティブに生きていけるかと思っていた。それでも一年間は何とかやりすごした。たまにずる休みをしたが、見つかることもなかった。成績も中の下あたりでうろうろした。何となく理系を選んで二年生になった。そして、理系中心のカリキュラムとなったが、くそ面白くない。どの授業もつまらない。勉強は教えてもらわなくても自分一人でできる。そうだ、俺は、小説家になりたかったんだ。なのに、何となく流されてしまった。どうして今こんなところにいるんだ？」

そのように自問したレイは、二年になった四月下旬から早くも学校を休み始めた。途方に暮れた両親が学校を訪ねてきて、相談は始まった。そのころはまだ高校の保健室にいて、「なみのね」を開設する数年前のころだった。

.....

「小学校はさあ、人格形成に役立つけど、高校って、人格形成にも役立つないし、大学行くための勉強なら、自分でできるし、行く意味ないんだよね。こんな窮屈な生活を

飛び出して、いろんなことがしたいんだ。昼間はバイトして、夜は小説を書いて、そして勉強もする。親にはわかっただけじゃない。人生に責任を取れるのは本人だけだしさ。今じゃないとダメなんだ。大学に行ってから小説を書くなんて、普通じゃない。ダサイよ。ステレオタイプにはなりたくないんだ。早く学校をやめさせてほしい。なんなら今日をもって学校をやめたい」一家言を持って持論を滔滔と語るレイは、滑らかに話す口調とは裏腹に、目は右に左に動き、首元はアトピーを掻いたように赤くなっていて、少しそわそわと落ち着きがない。「どうせやめるつもりなら、やめる前に、やりた生活をお試ししてみたら？バイトもしてみたらいいじゃない。あなたにとっては考え抜いた結論かもしれないけど、ご両親にとっては寝耳に水。小説家になるといって話れる人なら、ご両親に納得していただいてからやめてもいいかもね」などと話をしてみる。レイはそれもそうだと言いながら、その後もバイトには行こうとせず、だからといって学校にも登校せず、中途半端にイライラを募らせる日が続いた。

その後「動作法、やってみる？」という誘いかけに興味を示し、一週間に一度のセッションを行ってみることにした。レイは動作に集中し、自分の緊張を自分でほぐすようになってから、よく夢を見るようになった。ある時は、おしおき部

屋に自分と母が閉じ込められていて、そこはホールケーキを覆う鉄の入れ物のような部屋で、恐怖が迫ってきた。また、「レイに悪魔が取りついた」と語る父に、レイと何人かの友人とで怒られる夢は、何度か繰り返し返し見た。メジャーリーグのすごい選手を紹介しているテレビを見ていたら、そのテレビを誰かに盗まれてしまった夢。音楽系のライブが行われていて、その横に「ハンス」と名乗る自分がトランポリンの上で飛び跳ねていて「俺を見てくれ」と叫んでいる夢。どれも、満たされない日常への不満と恐怖、承認欲求が現れていた。主役になりたいレイは、夢でも主役になることはなかった。中学の同級生はアイドルになって舞台上で歌っているのに、レイはそれを見ている人だった。

ある日、指導員に命令されて並んでいた生徒の一人が崖から落ちて死んだ夢を語ったレイに「そろそろ主人公になってもいいかもね」そんな話をした。レイは回を重ねるごとに冷静に話ができるようになってきていたし、自己理解も進み、家族に対する客観的な理解も進んでいた。感謝と思いやりも芽生えていた。「そうですね。そろそろ学校をやめる時期を決めます」「いつにしたいの?」「親が納得するための期間を設けて、夏休みにやめることにします」「八月ね。八月のいつがいいの?」「じゃあ、末広がりの八日で」

その話は、両親にすんなりと受け入れられるものではなかったけれど、学校に行かずに家で落ち着いて規則正しい生活をしているレイは、いつしか周囲に「このまま自分のペースで勉強して、目的を持って大学に行くなら、やめても仕方ないかも」という思いを生じさせていた。

その日「教室に本当に入れないかどうか、試してみる?」と提案してみると「それもいいですね。じゃあ、変装して廊下を歩きましょうか」と珍しく乗って来た。レイは早速、保健室の白衣に身を包み、帽子とサングラスとマスクをして、とても不審な恰好になった。そして、何度もトイレに入って自分の様子を鏡で確かめたあと、サングラスはおかしいと言ってははずした。マスクも大げさだと言ってははずすと、帽子だけは目深にかぶった。「先生もついてきてください」と言われて、一緒に歩くことにした。授業中の廊下。ところどころ窓が開いている。直線距離をひたすら歩く。緊張感が襲ってきた。どうしようもなく重い足取り。誰かに見られないかと思うと、心臓が圧迫される。ああ、この子は、この感じを毎日体験していたのか。これでは登校するのは無理なはず。納得した。レイはむしろ平気で、清々しい顔をしていた。それは、レイをレイに代わって私が体験するという不思議な出来事だった。心底レイを理解できた瞬間だった。